

# 教員研修における発音指導に対する教員の意識 Teachers' Attitudes toward Teaching Pronunciation in Training Workshops

河内山 真理\*      有本 純\*\*  
Mari KOCHIYAMA      Jun ARIMOTO

## 抄 録

本研究では、教員に対するアンケートから英語の発音指導の実情と教員の意識について明らかにすることを目的としている。教職に就くまでに、英語の発音指導法について、学ぶ機会を持った教員は少ないこと、教職に就いた後に十分な研修の機会が提供されていないことが確認された。また、教員が授業で用いる言語は英語も増えてはいるが、日本語が主体になっていること、英語発音の目標としては、国際的に通用すればよいという柔軟な考えを持っていることも明らかになった。しかしながら、発音指導について迷うことが多く、教職課程あるいは現職教員研修での機会提供が必要だと確認された。

## 1. はじめに

本研究では、英語の発音指導の実情と教員の意識に焦点を当て、その問題を明らかにすることを目的としている。なお本稿は、2015年8月4~6日に千里ライフサイエンスセンターで開催された外国語教育メディア学会第55回全国研究大会での口頭発表に基づいて、加筆修正している。

発音指導について、河内山他(2013)において、教職課程で発音指導を学んでいないことが、発音指導に自信がない教員を生み出し、発音指導が十分にできない教員の生徒が発音を十分に学ばないで大

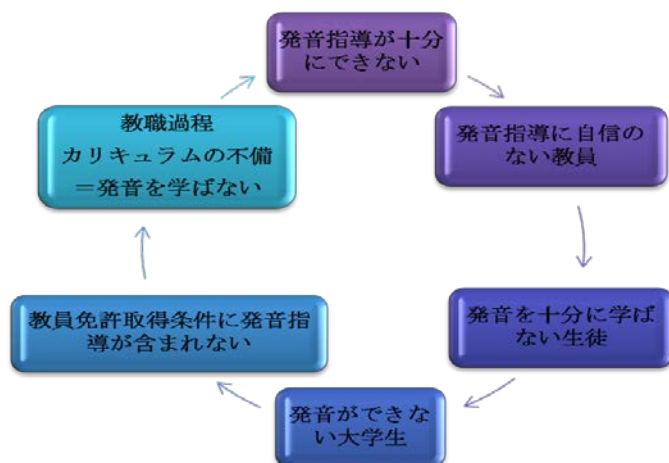


図1. 発音指導の悪循環

\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

\*\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

学に入り、また発音を学ばないまま教員になるという悪循環を指摘した（図1）。今回、発音指導に関する研修会の参加者にアンケートを行い、研修会に参加する熱意のある教員の場合について、発音指導やその学習等に関する現状を調査した。

## 2. 調査

### 2.1 調査協力者

2014年に京都と大阪で実施した発音指導の研修会において、参加者を対象にアンケートを行い、発音学習や発音指導の実態についての調査を行った。回答者は、現職の小学校・中学校・高等学校・大学教員、大学生、大学院生または英語指導者56名である。その内訳は、小学校3名、中学校3名、高等学校23名、大学9名、学部学生・院生17名、その他1名であるが、院生の中には教員経験者もあり、教員経験のないものは15名、他の41名は1~40年の教歴を持っている（図1、2）。これらの研修会は、現職教員が発音指導法を修得する目的で組まれたものであり、音声の知識から実践的指導までを含んだプログラムで構成されている。なお、本研修会は本科研で作成した発音指導法のプログラムを実施しフィードバックを得て修正することを目的に実施したものである。

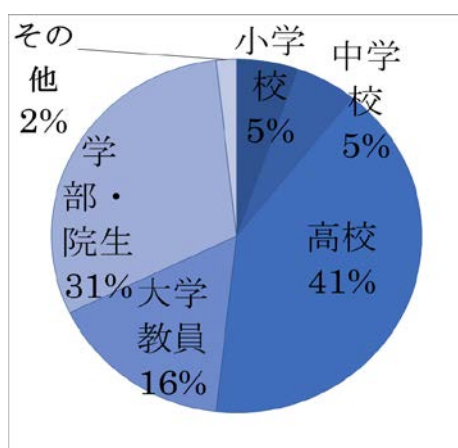


図2. 調査協力者の内訳

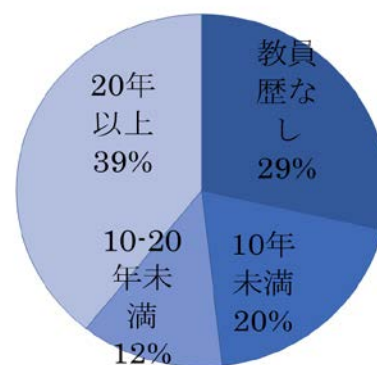


図3. 調査協力者の教員歴

### 2.2 調査項目

アンケートでは、発音指導法に関する学習歴、授業で発音指導を行う頻度、授業での使用言語、自分の英語発音、指導で目標とする発音、指導上の困難等について尋ねた（付録参照）。

## 3. 結果

### 3.1 学習歴

参加者のうち、何らかの発音指導に関する学習歴を持つ者は、全体の57%を占めていたが、その1/3が大学の教職課程における授業での学習であり、現職に対する教員研修会などでの学習歴は少なかった（図4）。このことから、大学を卒業してしまえば、発音指導について学ぶ機会は少ないことが容易

に推察される。また、今回のように、発音指導の研修に参加する意欲のある教員でも、その4割以上が発音指導を学んだ経験がなかった。

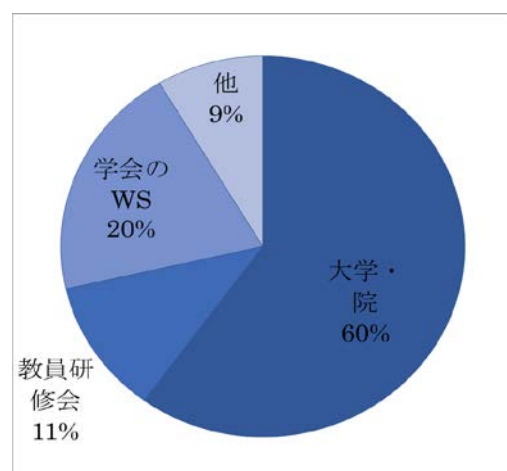


図4 どこで発音指導を学んだか

### 3. 2 発音指導の頻度

実際の授業でどのくらいの頻度で発音指導を行っているかについては、教員経験のある者のみの回答で、時々行っているのが49%、次いで頻繁に行っているのが17%、毎回行っているのが12%であった。研修会に参加するほど発音指導に積極的な意識のある教員でも、その10%は指導していないという事実が判明した。理由としては、時間的制約等も考えられるが、指導を担う教員が指導方法を学んでいなければ、授業での実践は容易ではないだろう。

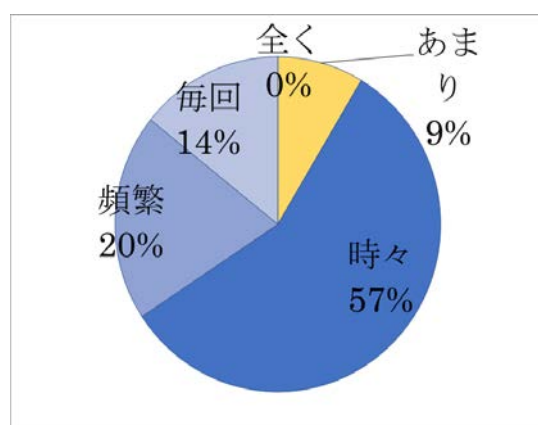


図5 授業で発音指導を行う頻度

### 3. 3 使用言語と目標

授業で使用している言語は、図6に示した通り、主に日本語が29%、主に英語が1.8%、どちらかというと日本語32%、どちらかというと英語12.5%となっており、日本語使用が多い。しかしながら、「ど

ちらかという」という偏りはあるものの日本語・英語の両言語を使用している者が半数近くを占めており、教員が授業で実際に英語を使って生徒にモデルを示している様子が伺える。

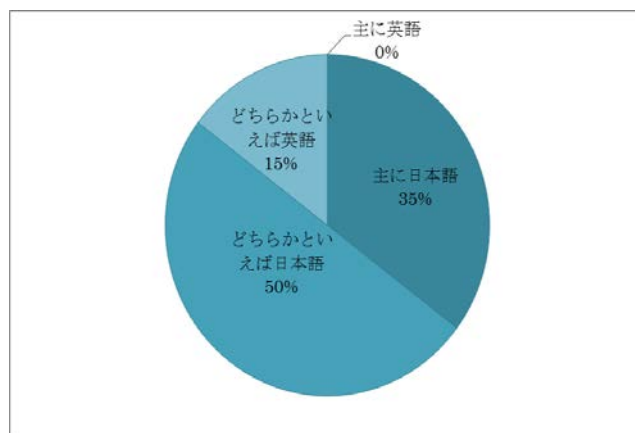


図6. 授業での使用言語

自分自身の発音は、ネイティブ・スピーカー（NS）レベルと見なす参加者が1割、他はEILか日本語の影響が強い英語であると考えていた（図7）。参加者の77%は、目標とする発音を、ネイティブ・スピーカー（NS）並みではなく、国際英語（EIL）でよいと考えており、自らの発音レベルと目標が近くなっており、柔軟な姿勢が伺える（図8）。過去の調査、河内山他（2011）では、中学校英語教員の61%が発音指導時にNS、34%がEIL型の発音を用いたいと回答していたが、大きな意識変化が現れている。

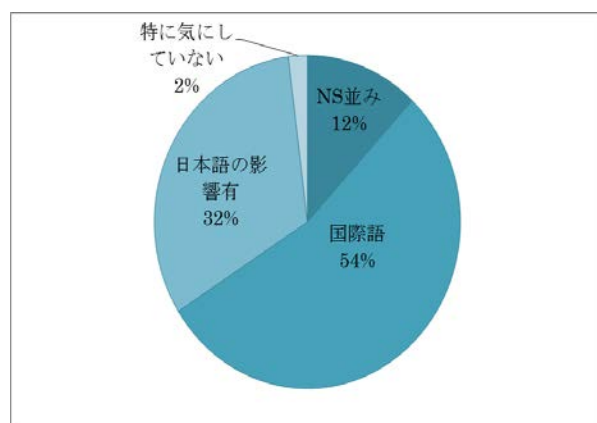


図7. 教員自身の英語発音

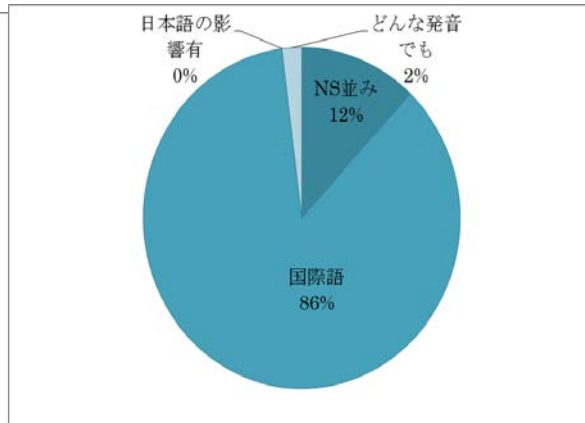


図8. 指導目標の英語発音

### 3. 4 指導上の困難

困っていること・うまくいっていないことについての自由記述からは、以下の通り指導現場での問題点が浮かび上がった。

- 1) 自分の発音やイントネーションに自信がないという教員自身の知識や技能に関する問題点
- 2) 指導の体系や時間配分などカリキュラムに関すること

- 3) 生徒の動機付けや注意の仕方
- 4) 指導の方法
- 5) 声を出してくれない場合の対処法

教員自身の発音については、教員になるまでに発音を学ぶ機会がないことが自信をもてない大きな要因であると考えられる。教職課程においては、現行では、英語音声学は必修ではないため、英語の母音や子音をどう調音するのか、実は学んだことがない英語教員も多い。また、教員自身が発音できることと、それを学習者に指導することは、別である。特に、イントネーションや強勢などのプロソディに関する指導法は、指導が困難であると感じている教員は多い。河内山（2013）で示したように、発音指導を適切に行うために、英語音声学の知識、教員本人の発音能力、導入・矯正など発音の指導法という3つの要素を統合する「発音指導力」が必要であるが、英語の教職課程をもつ学部でこれら3要素を満たしているのは4%、1要素が23%、2要素が32%、全く扱っていない場合が40%あった。現在の教職課程の状態では、この問題は解決できない。

指導体系やカリキュラムについては、中学校や高校の教科書は、ばらつきはあるものの、発音について何らかの取り扱いがある。しかしながら、中学校の検定教科書でも、発音記号の扱いや説明に差異があり、教員の判断に任されてしまうと自信のない場合には、時間的制約などを理由にその部分を割愛してしまう可能性も否めない。実際に、調査協力者の4割が、発音やその指導を学んだことがないというのは、教職課程だけでなく、中学・高校の授業でも指導されていないという事実を反映している。動機付けや指導法の学習機会がないと、教員が指導できず、図1で示した悪循環が繰り返されることになる。

#### 4. 研修の機会

大学卒業までに発音指導について学ぶ機会がないならば、現職研修等でしか学ぶよりないが、実際にどのくらいの研修の機会が提供されているのだろうか。

現職教員と研修の機会については、ベネッセ（2009）では、中学教員の回答として、41.2%が十分な研修が受けられないとなっており、過去5年間で英語教育関連の研修に参加した者は92.9%ではあるが、その回数は年1回未満～2回62.9%である。この結果によれば、中学教員は研修には年に0～2回しか参加していない。また、教員が役に立っていると考えている研修は、都道府県主体のものが45.6%、大学の講座8.5%、学会のワークショップ5.3%となっている。60.8%の教員が具体的な指導法や教材研究などの実践的な研修が必要と考えているが、機会は不十分だと言える。しかし、これは英語教育関連の研修に関する回答であり、この中で英語の発音指導について学ぶ機会があったかは不明である。

では、2009年から導入され、現在10年に一度義務づけられている免許更新講習ではどうだろうか。2015年度の兵庫県・大阪府内で提供されていた講座は、英語関連の講座が22大学36講座あった。このうち一部でも発音という内容が含まれているものは5大学5講座であった。2012年度には38大学12講座あったが、発音指導法は2講座であった。

学会が提供する研修会にしても、発音指導についての研修会やワークショップを開催している場合

はわずかであり、学会員が主たる対象でもあるので、非学会員の教員が参加する機会は少ない。2015年度に近畿圏で行われた主要学会・セミナーの類いで発音指導を取り上げていたのはほぼ0、「ほぼ」というのは、音読やシャドーイングはあったからである。しかし、発音指導法はなかった。

これらのことから、英語教員は、教職に就く前に、発音指導を学ぶ機会がなく、教職についた後にも、学ぶ機会はあまり提供されていないということが、この現状から判断できる。

## 5. おわりに

今回の調査では、自ら発音の研修会に参加する意欲のある者が対象であったが、こうした参加者でさえも、発音指導に必要と思われる知識や方法がわからない、自信がないという回答が目立った。また調査からは、発音指導を適切に実施するために必要な知識やスキルを、教職課程あるいは現職教員研修等で指導法を学ぶ必要があるが、いったん教職に就けばその機会は少なく、また継続的な学習の必要性を感じていることも伺うことができた。

調査対象が偏っているため一般化はできないが、発音指導について必要な知識や技術を学ぶ機会や場が十分に提供されていないという事実は否定できない。教職課程および現職教員への研修プログラムでこの状況が改善されなければ、発音指導が不十分なままの現状が続いていくことが予測される。このような現状から、本科研では教職課程における発音指導プログラムを開発し、併せて現職教員向けの発音指導研修プログラムも作成した。

**謝辞** 本研究は、科学研究費助成金（基盤C一般：課題番号23520729 2011-2014年度）の助成を受けて行った。また、発音指導研修会は、2014年5月25日よりよい英語授業を考える会と英語発音教育研究部会の共催でキャンパスプラザ京都、同年12月25日に第34回 KELES（関西英語教育学会）セミナーとして龍谷大学大阪梅田キャンパスにおいて実施した。アンケートに協力いただいた方々に感謝の意を表する。

## 参考文献

- ベネッセグローバル研究室(2009) 「第1回 中学校英語に関する基本調査報告書【教員調査・生徒調査】」 <http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3186>
- 河内山真理、有本 純 (2015) 「教員研修における発音指導に対する教員の意識」 『外国語教育メディア学会第55回全国研究大会予稿集』, 88-89
- 河内山真理・有本 純・中西のりこ(2013).教職課程における英語発音指導の位置付け *Language Education & Technology*, 50, 119-139
- 河内山真理・山本誠子・中西のりこ・有本純・山本勝巳(2011). 小中学校教員の発音指導に対する意識－アンケート調査による考察－ 『LET 関西支部研究集録』 13, 57-78

発音指導法研修会アンケート

2014/05/25

有本科研では、現職教員のための英語発音研修プログラムを開発し、本日はそのプログラムを実施しました。この内容についての検証作業に必要な資料として、先生方からのご意見を伺い、修正を加えたいと思います。忌憚のないご意見をお聴かせ下さい。なお、本アンケートは、研究以外の目的で使用するのではなく、個人が特定できるような公表は一切致しません。ご協力下さいますよう、よろしくお願い致します。 有本 純（関西国際大学：科研代表）

1. 所属校種： 1) 中学校 2) 高等学校 3) その他（具体的に ）

2. 教員経験年数： ( ) 年

3. 海外留学経験： ( ) 年 ( ) カ月 滞在国名 ( )

4. 発音指導法を、教職課程または教員研修等で学んだことがありますか？

1) はい 2) いいえ

→「はい」と回答された方のみお答え下さい。どこで学びましたか？

1) 教職課程・学科の専門科目 2) 教員研修会 3) 学会のワークショップ

4) その他 ( )

\* 本日のプログラムについてお尋ねします。

5. 各々の項目に対する満足度を、5段階で評価して下さい。

5：たいへん満足 4：やや満足 3：どちらでもない 2：やや不満 1：かなり不満

1) 講義1（音声学の基礎） 5 4 3 2 1

2) 診断テストのフィードバック 5 4 3 2 1

3) 講義2（モデルと目標、日本語話者の問題点） 5 4 3 2 1

4) 講義3（導入指導法） 5 4 3 2 1

5) 実習（矯正指導法） 5 4 3 2 1

6) 討論・発表（目標設定、その他の問題点） 5 4 3 2 1

6. 上記の6項目で、改善が必要と思われる項目（=評価が1または2の項目）がありましたら、具体的に指摘またはご提言下さい。

7. 日頃、発音指導でお困りのことがありましたら、お書き下さい。

8. 本日のプログラム以外に、発音指導に関して「このような内容があればよいのに」というご要望があれば、お書き下さい。

ご協力、ありがとうございました。



## Abstract

This research examined the situations of English teachers and their attitudes towards pronunciation teaching. The results of questionnaires show that most teachers have not learned how to teach pronunciation before getting their jobs and that after getting jobs they have not opportunities to learn pronunciation teaching. This is one of the reasons that teachers do not teach pronunciation in their English classes. To solve this, more training should be provided for teachers and teaching pronunciation should be introduced in the curriculum of teacher's license courses. Another result shows that most English teachers set their goals of pronunciation to their students as EIL, which is a great attitudinal change for them and also is an important factor in Japanese English classes.